



ぷらっとシネマ 哀しくも醜い女性の欲望『南へ
(Vers le Sud) 』（ロラン・カンテ監督）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 萩原, 弘子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/15460



哀しくも醜い女性の欲望——

『南へ (Vers le Sud)』(ロラン・カンテ監督)

ハイチの空港で、ホテルマンのアルベールはアメリカからの泊り客ブレンダの到着を待つ。首都ポルトープランスの喧騒から遠い、美しい海辺のホテルには、毎夏をそこで過ごす中年女性たちがいる。それぞれ日常に疲れて、しばし癒しの時を過ごしに来るアメリカ人常連客だ。物語は、ブレンダを含む3人のアメリカ人女性とアルベールによる、1人称の語りを織り交ぜながら進行する。

ブレンダは3年前の甘美な宵が忘れられなくて再訪した。40代半ば、破綻した結婚から逃れて来たハイチで会ったのが、まだ15歳のレグバだった。まばゆい若さの黒人青年との官能の一夜は、中年の自分には起こるわけがない夢のような経験だった。ブレンダは、年甲斐もなくロマンチックな気持ちでレグバを捜す。彼を見つけるのに苦労はなかった。18歳になったレグバは、同じホテルの海浜で、ほかの中年女性客と日光浴をしていた。

その中年女性エレンは55歳。名門大学でフランス文学を教える。毎年、休暇になるとここに通いつめて6年になる。レグバを「親密な友」と呼び、「交流」のあとはちょっとした「援助」をしてあげる。要するに、レグバは、アメリカからの女性観光客にセックスを含む曖昧なサービスをして金をもらっている。そうと割り切ったつもりでレグバを可愛がるエレンと、もっと純粋にレグバを思っているつもりでブレンダのあいだに火花が散ったりもする。そんな2人の気持ちをうまくあしらう術をレグバは知っている。

レグバと近しいつもりでいた2人だが、やがてそれが幻想であることを突きつけられる出来事が起こる。レグバには、エレンとブレンダが知る由もない彼自身の人間関係と生活があった。

背景となっている1970年代末のハイチは、「ベイビー・ドック」の名で知られる2代目独裁者デュヴァリエの時代だ。至近の大国アメリカから進出してきた資本に、人々は安価な労働力として使われ、その体制を維持するために、アメリカは終身大統領を宣言する独裁政権を支持していた。かつてフランスの奴隷農園だったサン・ドマングが、1804年、黒人国家として独立したのがハイチだ。その後のハイチ史は、同国を支配下に置こうとするアメリカとの格闘の歴史である。

アルベールが1人称で映画観客に向けて語る

のも、彼が生きてきたそんなハイチ現代史の一端である。家族の男たちは、自分も含めて、みな政治活動の闘士だった。父は、白人とは握手もしたくないとよく言っていた。いま自分がホテルで白人に給仕しているのを知ったら、父はどう思うだろう。アメリカの属国に成り果てたハイチで、アルベールは黙々とエレンたちのために働きながら、苦々しい思いを胸の奥に抱えている。

いろいろな意味で、見るのがつらい映画だ。経済格差に乗じて南へ出かける北の観光客があるう特権の醜さ、その特権が南の若い性に対する欲望と重なることで醜さはさらに増す。しかもここでは、その欲望の主が女性である。つまりは買春だが、男性の買春と違って、当人たちはもっと私的な関係のつもりでいる。観光買春は、むろん、「男も買っている」「女も買っている」と並べて論じるべきものではない。男性の買春のほうが産業としてはるかに大きいし、経済的、社会的問題として、より根源的だ。そうであるにしても、女性の買春という現実が存在するのはまちがいない。

エレンとブレンダの行動を買春であると言ってしまうと弁護の余地はない。しかしこの映画を見るのがつらい最大の理由は、彼女たちの行動の動機が、日本の私にもよくわかることにある。仕事も結婚も着地点が見えてきて、自分の人生がどれだけのものかはおもう読んでいる。加齢とともに容色は衰え、ロマンスの可能性など望めない。それでもまだ「なにか」が起こるかもしれないという期待、いやこれまでしっかりやってきたのだから、それに値する「なにか」を手に入れる権利があるという自信。期待も自信も危うくかすかなものにすぎない。それでも、多少の金があれば、一時的であれ、その「なにか」を実現できる。エレンとブレンダは、そうやってハイチに来た。女性としての諦めと喪失感、せめて一瞬の愉悦を味わいたいという哀しい望み、それらを抱えて南へ向かう北の人間の身勝手と傲慢。どれも他人事でないだけに、エレンとブレンダの哀しさと醜さは、鏡で自分の姿を見るようでつらい。

「つらさ」も含めて見応えのある作品であり、哀しさと醜さを演じる女優陣の力量もみごとだ。公開邦題がどうなるかは知らない。

(2005年、フランス・カナダ映画、108分)